



414
A 716



戦争近況

先侵
記載セシ八月廿四日セルモヤ総督(魯將)「チエルナエフ氏
アレキシナツ」~~氏~~附近ニ於テ大勝利ヲ得シ後一周日間ハ「トルコ」
勢モ再ヒ攻来ラス「セルモヤ」勢モ進撃ノカナクシテ双方「モラハ」
河ヲ隔テ暫ク相對峙セシガ本月一日「トルコ」元帥「アブツルケリム」
ハ新ニ六万ノ兵ヲ帥ヒテ「モラハ」河ヲ越ヘ其衆ヲ分テ二ト為シ
「ツハ」アレキシナツト「ドリグラード」ノ通路ヲ漸ントシ「ハ」同時ニ「アレ
キシナツ」周囲ノ諸砦ニ攻来リ奮戦十二時間ニメ遂ニ「チエルナエフ」
ノ軍(セルモヤノ右翼)ヲ破リ「アレキシナツ」ニ接スル要害数ヶ所ヲ乗取
レリ「チエルナエフ」ハ終日防戦百方尽カセシト虽敵兵ノ我通路ヲ
濟テ「ドリグラード」ニ進撃セシラ慮リ遂ニ大佐「ホルヴァトウイテ」ヲ留
テ「アレキシナツ」ヲ守ラシメ而メ自ラ部下ノ兵ヲ引率メ「ドリグラード」
ニ退キ同所ヲ以テ第一ノ防線トナサ、ルヲ得サルニ至レリ

事務官

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈



アレキシナツハ未タ「トルコ」ノ手ニ陥リシ報告ナシト虽其府ニ接セル
一二咽喉ノ砲臺ハ既ニ敵ノ有トナリ加之「セルビア」ノ本營ハ「テ
リダラード」迄引上ケタレハ復敵兵ノ長驅メ「モラビ」澤ニ進入スルヲ
防ク能ハガルニ至リ而メ現ニ「トルコ」勢ハ「クルヂヨワツ」ニ迫レリ是
今週二周ノ戰場ノ一大新聞ニメ「トルコ」ハ勢ト怒潮ノ如ク向フ所
其呑噬ヲ逞クシ人々自カラ安セス主戰黨モ今ハ陰ニ六大國
仲裁講和ノ成ルヲ冀望スルニ至リト云フ蓋シ「セルビア」政府
講和ノ媒ヲ請ヒシ以來六政府ハ其在君士丁府各大使ニ令
メ「セルビア」講和ノ仲裁タラン「トルコ」政府ハ言ヒ入レシメ續テ
各大使等相會シ先ツ休兵ヲ「トルコ」政府ニ勸告セシ「ラ」議セ
リ茲ニ魯英二政府間ニ議論相協ハガル者アリテ三五日ノ遲延
ヲ惹出セリ其故ハ魯政府ハ講和ノ題目ヲ後ニメ先ツ休兵
ヲ勸メント主張シ（所謂 *Unconditional Armistice*）英政府ハ

講和ノ大目ヲ同時ニ畧定スルニアラスバ休兵ノ説行ハレ難シト
主張ス（*Conditional Armistice*）又魯政府ハ三月間休兵ヲ
勸メント云ヒ英ハ一月間ヲ以テセリ澳伊二政府ハ英ニ同意シ
以為ラク一月モ早く無益ノ血ヲ流スヲ防ク為メ休兵ヲ勸告ス
ルハ各團皆同意ナリト虽講和ノ題目ヲ預定セヌメ徒ラニ三月ノ
休兵ヲ勸ムル「トルコ」政府ハ兼謀セサルヘキヲ以テ先ツ一月ノ
休兵ヲ勸メ其時間ニ講和ノ大畧ヲ議メ尚其休兵ノ時日ヲ
定スモ得ヘシトセリ日耳曼政府ハ其大使ニ令メ各大使等
相当ノ評議ニ任セント言送レリ佛政府ハ巴里訂約六大國ノ一大
會議ヲ「起」ガン「ラ」言出セリ如是ノ各團ノ議相合ハサルヲ以テ
數日ノ遲延ヲ引起セシガ本日落手ノ新報ニ拠レバ群議遂ニ
魯英二政府ノ立意ヲ折衷シ講和ノ題目ヲ後ニメ先ツ一月
ノ休兵ヲ勸告セシニ決定シ而メ其勸告書ハ所謂 *ル*

十卷 自

Memorie

参考書ト云フカ如シト為シ

連署ニアラズニテ各自同文

言ノ書ヲ相次テ送ルルニ決シ去ル五六日頃ニハ多分「トルコ」政府ハ
 差送りニナリタルベシト云フ或ハ云フ其文ハ「イディチナルニアラス
 ニテ各政府各異ナル所アルモ妨ケズト決セリト或ハ云フ英大
 使ハ先ツ一ヶ月ノ休兵ヲ勸メ講和ノ條款ハ直チニ續テ商議
 スベク「トルコ」政府モ此勸告ヲ拒ムニ於テハ他ニ兵威ヲ挾テ
 仲裁ヲ容レシト言出ル政府アルモ魯ヲ指メ云フ英政府ノ救助ヲ頼
 ムハカラスト言^兼タリト是或ハ然ラン然レ此等ハ數日後ニアラ
 サレハ其何レカ真ナルヲ判シカタレ何レモセヨ最早本日迄ニハ六
 大政府ヨリ休兵ノ勸告書ヲ「トルコ」政府へ送リタルナレハシ爰ニ
 差諾メ此際ノ疑問ハ「トルコ」政府ハ果メ此勸告書ヲ納ルル哉
 否將タ之ヲ納ルルニモセヨ^{約束次第ニ由ルト}言出ル哉否或ハ言
 ヲ左右ニ托メ返答ヲ延シ更ニ兵ヲ深ク「セルフヤ」内部ニ進メテ

全勝ヲ惜メントスルモ測ル可カラザルノ三點ニ在リ始メ仲裁
 講和ノ説起ルヤ「トルコ」政府ハ必ラス一大捷報ヲ歐洲各政
 府ニ示メ而後徐ロニ講和ノ約束ヲ議セント謀リ急ニ諸軍
 ヲ勵シテ必ラス「アレキシナツ」ヲ抜カシテ期シ本月一日ヲ以テ強シト其
 志ヲ達スルヲ得タリシガ猶未ダ憚タラズメ勉メテ休兵ノ約ヲ延
 シ其時間ヲ以テ長駈シテ「テリグランド」ヲモ抜ント欲スル者ノ
 如シ是實ニ当然ノ目度ニテ畢竟講和ノ條款ハ勝敗ノ跡
 ニ由テ定ルベケレハナリ況ニヤ目下棄勝之兵氣ヲ抑ヘ不得止
 メ講和ノ勸告ヲ聽クハ當ニ其政府ノ本意ナラザル而已ナラス
 其將卒ノ報國心ヲ損スル一亦淺少ナラザルニ於テ予予惟
 フニ此際歐洲大國ノ仲裁ナカラシメバ「トルコ」ハ必然「セルフヤ」
 全國ヲ陥ルヲ得ヘテ而シテ「モンテ子グ」モ亦夙既其掌中
 物タラサルヲ免レ難カルベシ然ルト虽如是ハ魯國ノ許甘ル

十卷

所タル獨リ歐洲各國ノミナラストルコ政府モ亦自カラ能ク之ヲ
知レリ故ニ彼レ到底大國ノ勸告ヲ納ルサルヲ得スト虽モ先
ツ好結果ヲ得テ而メ後チ之ヲ納レントス而メ英ハトルコ方
タルハ多少其志ヲ遂ケシメント欲シ魯ハ之ニ及シテ成丈ケ
早ク兵ヲ止メセルヲヤヲシテ城下ノ盟ヲ免レシメントス是レ
二國ノ論常ニ合ハサル所以ナリ虽然是レ尚小ナリ夫ノ講和
ノ條款ヲ定ムルニ至ラハ六大政府殊ニ英魯二國ノ間必ス
容易ニ協議セザルベキハ世人ノ預期スル所ニシテ之レガ為メ政
州治安上ニ何等ノ影響ヲ惹起スヘキハ孰レモ之ヲ肘度
スルヲ得ス特ニ頼ム所ノモノハ魯帝ノ乱ヲ好マサルト近來英
國輿論ハ「トルコヲ隣ムノ心大ニ減却セシト」本邦は別州其他ニ於
テ忍無道ノ所業アリニヨリ更ニ
一個ノ原因ハ英ノ實力ハ魯ニ敵スル能ハサルベキトニヨリ遂ニ相
怒メ政州ノ治安ヲ破ルニ至ラサルヘキニ在リ要之今次ノ戰

ハ到底東邦疑問ノ進歩ヲ為サヌメ依旧ニ字 *Postquam*

Salva quo

ノ外ニ出サルベシ是レ實ニ「トルコ」國一時ノ幸ニ
「スラフオ」人民ノ不幸ナリ雖然世道ノ日ニ開化ニシテ之ニ從ヒ
回教ノ困ヲ以テ政州扼要ノ地ヲ領シ單ニ勢カラ挾テ以テ其
基督民ヲ駕御セントスルハ日ニ益難クハ騷亂漸ヘズ遂ニハ
退テ亞細亞領ニ入ルニ至ルベキハ必然タリ現下「バルカン」半島中
回民ハ特ニ三分ノ一ニ過キスニテ其餘ハ皆基督民タリ而シテ
其保衛ノ義務ヲ司ル者ハ隱然政州ヲ駕御スルノ勢威
アルヲ以テ一旦緩急ノ秋ニ臨マバ十有五カニ過キサル「トルコ」勢
ノ如キハ卵ヲ以テ石ニ當ルニ異ナラサルニ予故ニ曰ク「トルコ」國
今次ノ捷軍ハ特ニ一時ノ幸ニメ永續ノ基ト為スニ足ラズモシ
夫ノ永續ノ基ヲ立シテ欲セバ今次ノ好小機ニ乘シ漸然内國
百般ノ政務ヲ改革シ基督回兩民ノ權利ヲ均スルノ外ナカル

ベシ然レハ是レ或ハ可言而不可行者タレハ陛下ノ以テ衰朽ノ期ヲ待ツノミ、懸ムハキ哉

以上開陳スル所ハ今回二周日間戦争並ニ外交上ノ大畧ニメ更ニ一個歴史上ノ履蹟トナルベキ者ハ八月廿日「トルコ」帝「ムラト」第五世病ヲ以テ廢セラレ其弟「アブヅルハミット」位ヲ襲シ一事ニアリ「ムラト」五世ハ即位ノ始メ大ニ聲望アリシガ亡シ幾其聲望ハ本人ノ精神ト共ニ昏ク遂ニ改テ親ラスル能ハガルニ至レリ夫レ肉食子弟猶且真才ヲ出サス況ニヤ敢テ之ヲ「トルコ」ノ「プリンセス」ニ望ムベケンヤ新帝「ハミット」ハ「ムラト」ニ比スレハ心膽稍堅ノ稱アリト虽未タ以テ深ク信ヲ執ルニ足ラス今次ノ廢立ハ歐洲各國更ニ之ヲ驚ニ掛ルモノナク而メ「トルコ」國民モ亦看テ以テ常日ノ觀ヲ作シ一毫ノ紛擾ナクシテ幸濟タルハ幸カ不幸カ

喙ヲ容ルニ痛シ特ニ之ヲ欄内ニ并記メ以テ史家ノ備忘ニ供スル耳夫ノ毎日戦争ノ紀事ニ至テハ先使ノ如ク詳細ナル能ハガル者ハ予本月一日ヨリ「オリエンタル」三カレスノ頁ニ列ナリ朝夕出席セサルヲ得サルニヨリ「夫ノ「タイムズ」新聞ノ如キ詳細ノ新報ヲ摘録スルノ暇ナク不得已当府出版「ゴロース」新聞等ヲ人ニ托メ摘録セシメ者ニ過キス故ヲ以テ特ニ不偏ノ公報ニ之キノミナラズ短時間休滯讀者ヲメ嚙蠟ノ數アラシム可シ幸ニ之ヲ諒スルアレ

明治九年九月十二日

寺島外務卿殿

榎本武揚

